

「日暮硯の研究」の濫觴と概略

恩田 恒久

***はじめに

平成五年度の大学院での修士論文となった「日暮硯」の研究は、二部構成である。

(第一部 宝暦改革の時期について)

(第二部 「日暮硯」・・・「田村記」との関係について)

第一部では、「日暮硯」の真实性虚構性についての検証を史料に基づいておこない、本論である「経済建て直し成功は事実」「恩田木工の芝居がかった言動は虚構」「領民の感謝と藩主の喜びは事実」「文中の年号が意図的に変えられている(恩田木工の役職就任時期が二年早いことをさす)」、その結果「日暮硯」は、史実に基づく「断」であり、藩主の顕彰の為に執筆されたものが、後にその内容が為政者側にとても都合が良かったので、江戸幕府お墨付きの政治改革のテキストとして全国的に世に出たのであろうということが結論となった。「日暮硯」の存在を知っている地元であるはずの長野県民、長野市民の数があまりに少ないのは本研究をしていて痛切に感じたことである。つまるところ、「日暮硯」は庶民市民の為の書物ではなく指導者管理者層が人心掌握、組織の再生の必要に迫られて読むジャンルの書物としての利用がなされていると考えられる。ただ、郷土の偉人の一人としての恩田木工の存在を教育関係者がとらえ、教材としての「日暮硯」の扱い方を研究されている方もいるということ、良い教材ができることを願っている。そのためにも更に「日暮硯」の謎の部分や、誤りの部分、フィクションと事実の区別などを明らかにしたいと考えた。

研究の第一歩として、宝暦改革の時期の確定を試みたのである。そして、恩田木工が「勝手方」という今ならば総理大臣兼大蔵大臣に就任した時期を明らかにした。そのことが「藩政改革成功」の重要な論拠になってくる。詳細については、長野市立真田宝物館発行の「松代六号」（平成五年）に発表しているのでご覧いただきたい。

第二部では、「日暮硯」のルーツを探る調査を試みた。

「日暮硯」には原典があった。「田村記」という書物である。「田村記」の存在は、昭和四十年代に入ってから郷土史研究家によって世にだされたが、全国的には注目を浴びなかった。描かれている内容が地域限定され過ぎているということ。その内容が当時の松代藩にとっても、江戸幕府にとっても、更に後の明治政府にとっても決して都合のよいものではなかったのである。それは、「田村記」が為政者の派遣した使者を撃退したという実話だからである。

窮乏している藩財政を救うべく、当時の藩主信安公は、江戸の経政の専門家「田村半右衛門」を松代に勝手方として遣わし、政治機構の合理化、租税の収納安定化、その他理屈では素晴らしい「新法」をもつて藩士、領民に接した。しかし、地域の特性実情を知らなかったことが、領民の反発を買い「一揆」が起きる。本来なら「松代藩寛延の百姓一揆」として歴史に残るところだが「寛延四年田村騒動記」という記録が残ってしまったのは礎、獄門等の厳しい処分が無かったことに由るものなのである。

この騒動を無事に治めた松代側の人物が恩田木工で、宝暦の改革以前から領民からの信頼が厚かったのである。「田村記」は、庶民の勝利を描いていることに支配者はおもしろいわけもない。そこで、「田村記」をベースに会話の部分でデフォルメして田村の言動を恩田の言動に置き換え、「日暮硯」では、「御仁政」ということで、恩田木工の手腕をたたえ、藩主の用人人事的確さを称えた書物に出来上がったのである。つまり、「日暮硯」は為政者の徳を称えたものであることから、そのような本が領民の間に伝わるわけもなく、「日暮硯」が現在も地元ではさほど知られていないのは、根底に「日暮硯」の虚構の部分に生理的な嫌悪が起きる人がいるからなのかも知れない。一方、「田村記」は、きちんとした本としては、平成三年に滝沢貞夫教授の監修で信教出版部から発行された「日暮硯」の前史として紹介されたのが初めてである。今回の研究にあたり、「田村記」とともに「天明四年辰年山中騒動記」の原本の実物複写の入手に成功した。「山中記」の中にも、恩田木工が登場してくる。それは、恩田のあとを継いだ役人が「新法」の提案を

したことに對しての領民側の返事である。「すべて、恩田木工様おおせのとおりの旧法にて」ということで騷動は収まるのである。「田村記」も「山中記」も騷動の発端は「新法」の押し付けであり、事態の收拾は「従来どおり」という「旧法」の継続で収まっているのである。その間、「日暮硯」にあるような領民側に立った施策を恩田木工は、打ち出している。俗に松代三十六興利という養蚕などに代表される多くの殖産事業の推進など現金収入獲得のための道を開いたことも領民、藩双方の財政好転に大いに寄与したのである。（修士論文を参照されたい）

「田村記」が今後とも為政者側のテキストになることはない。しかし「田村記」が無ければ「日暮硯」の読み物としてのおもしろさは出てこなかったと考える。

そこに、「日暮硯」の文学としての価値が出てくる所以である。

虚実取り混ぜて、ハッピーエンドで終わることが、物語でも、実際の人生でも重要なことである。

だから、二百五十年後の現在でも「日暮硯」は、松代藩家老「恩田木工民親が主人公」の、経済改革成功譚、並びに藩政治機構改革の成功譚とされ、「企業での中間管理職養成時に好適のテキスト」としての高い評価を受けているのである。「田村記」では、まずいのである。

「日暮硯」の価値の永遠性を考えるとき、常に利害が相反しないような人間関係を信頼を絆に考えるとき、「約束」の大切さを説いた書としての評価を受け続けるであろう。

本研究第一部で、問題にしたのは、「日暮硯」の描きたかったのは、本当に「忠臣家老の恩田木工民親」だったのかと言う点についてである。出版元の趣旨、更に著者の意図はそうではなかったらうというのが仮説である。私は大胆な予測を試みた。それは「日暮硯」は、藩主真田公の従四位下拝受記念に刊行されたものではないかということである。

「日暮硯」の正確な成立年代はわかっていない。当初宝曆十一年に書かれたとされたが（奥村本の跋文）、現在では文化二年（一八〇五）の異本型のもの、文化十一年（一八一四）正統本の存在が確認されている。

今回の研究中に入手し、論文に添付した仁科本は異本型に属し、医家（御殿医）に家宝として大切に保存されていたものを実物複写させていただいたものである。

このあと「日暮硯」研究のきっかけと研究の経過について述べて行きたい。

本稿では、研究のきっかけについて述べてみたい。

本研究第一部の仮説のきっかけになったのは、「日暮硯」の原文の表記からであった。

「日暮硯」の、冒頭部分をここに引用するので、ご覧頂きたい。

古語に曰く、「二代の君有らば、又一代の臣下有り」と。

誠にこの言や。

爰に信州川中島、松代の御城主、真田公の御幼童の頃より

当今に至るまで、御政務を伝え承るに、実に近代の賢君、当

代の名将なり。

(これは、笠谷和比古氏校注、新訂「日暮硯」(岩波文庫版)であるが、

戦前に出版された西尾実氏、林博氏校注の「日暮硯」でも、おおむね同様である)

予備知識を捨てて、この文を読んでみよう。

第一行は、「歴史に残る、名君があつてこそ、歴史に残る名臣がある」といつている。

(名将の下に、弱卒なし。千里の馬は常にあれども、名伯楽は常ならず。)という諺が直ちに連想されるほどの強い調子の書き出しである。

ここで言う、「一代」は、一世を風靡した、意味であろう。

第二行に至って、その名君は信州川中島、松代の城主、真田公であることがわかる。

「日暮硯」が、どんな読み手を想定して書かれたものか、図らずも第二行で露になる。「日暮硯」が、松代領内の人々に向けて作られたのではないことが、「信州、川中島」の記述でわかる。藩内向けのものなら、「御領内」で済むし、信濃国内向けなら「松代藩」だけで充分用を成す。おまけに、「川中島」と、いうのは当時は一面の農地であって城下町ではなかった筈である。信州の松代といつても、相手に通じそうもないとき、現代の我々も、「川中島合戦のあったところとか、善光寺さんの近く」を、このあたりを説明するときの目印に用いるのと同様である。

そして、当代の真田公は、幼いときから現在に至るまで、その主君としての実力を、人伝てにうかがうところによると（「伝へ承る」は、平家物語の常套句）。平温な近頃では、一流のまつりごとを行う立派な主君であり、戦乱の昔であつたなら名将と言われただろうという人である、と書かれている。

これだけでもわかるように、「日暮硯」の書き出しは、いかに真田公が名君たるのかを顕彰しているのである。

「日暮硯」は、つづいて幸弘公十五歳のエピソードとして「鳥籠と山寺彦衛門」の話が始まる。

この項での、幸弘公の行動、言動には、少々「常ならぬ」ところがある。お側衆の山寺彦衛門が、殿様の慰みにと、小鳥を飼うことを勧める。「私は、殺生は嫌いだ。」と、優しく断われば済む話を、馬鹿でかい鳥籠を縁側につくらせて、その中に彦衛門を閉じ込めてしまう。

そして、開放のときに訳を説いて「辱めを受けたと思わず忠義を尽くしたと思え」と褒美をやった、とある。

この話は、史実であろうか。山寺彦衛門は、その後どうなったのだろうか。もしも、幸弘公自身が山寺彦衛門の立場であつたら、どう思つたであろう。家に帰つて十両のお金を妻子にどう説明しただろうか。現在まで、この一節は、松代藩、公式記録に乗っているという発見はない。

小学校で、道徳の授業に使いたい、一節である。

この話が幸弘公の人柄のすべてを表していると、言つたら言い過ぎか。つまり、凄味の有る、お茶目な性格の少年としての表記である。

現代では人権上、絶対通用しないような仕打ちが、この頃は平気で行われていた。幕府へのちょっとした届け出ミスであつと言う間に改易、潰藩となり多くの浪人を生んだ時代である。

幸弘公は、当時ゆえの名君であつて現代では、変な少年で終わる可能性も有る。

だから、後世の「日暮硯」ファンは、恩田木工民親の捨て身の行動、言動に目がいつて、幸弘公が、さほど注目されなかつたのではなからうか。

彦衛門も恩田木工民親も必死でストレスをためて頑張つて、木工などは過労が祟つて早死にしているのに、幸弘公はのんびりと八十過ぎまで長生きをしている。

主君の一言で、家臣は命を捧げる、今なら一部の任侠の世界でのみ、尊ばれているおきてである。

ただ、ほんの五十年前まで、国が、紙切れ一枚で人の命を奪つていたことも事実であり、しばらくしたら、混乱の時代はなにかのきつかけで再来するかも知れない。

混乱の世の中でより多くの人々と自治を守るには、強力な支配力を誇示する必要から、有能ゆえに惜しまれつつこの世を去る小数の生贓が欠かせない。

有名政治家が、大きな疑惑に巻き込まれると有能な秘書が、どこかで消えて行く。

当時の大名が現代の政権与党で有るとしたら、千代田区中央区界隈の日常は、今も昔も同じことの繰り返しである。

帝王学とはそういうものであり、いかに少ない犠牲で多くの民を救つて国体を護持できるかを幸弘公は、儒学者たちに学んでいた筈である。

この話が、作り話だと安易に否定できないのは、二年後幸弘公が、十七歳のとき、恩田木工民親に対して、藩政の改革を申し付けている事実である。

山寺彦衛門が、贅沢禁止の人柱なら、恩田木工民親は、藩財政建直しの為の人柱そのものであつた。

恩田木工民親として、できれば、寿命を全うしたかつたに違いない。しかし、「今、やらなければ何時できる。自分がやらなければ誰ができる。」と、自分を励まして改革にあつたのである。「日暮硯」の中で「日暮硯」の作者の執筆意図とは違う恩田木工が芝居がかった言動行動で活発に一人歩きをはじめた。ここにいたつて当初の藩主真田公頼彰の

意図からは、どんどん離れていったのである。ここにおいて、「日暮硯」は文学としての市民権を得たのである。身を賭して、藩政と人心の建直しに尽くした恩田木工民親のけなげさが「日暮硯」の読者の胸を打ち、いつしか、主人公は幸弘公から恩田木工民親に取って代わり、「鳥籠の山彦」のくだりは、さして、顧みられなくなったのである。

私は、それまで「鳥籠の山寺彦衛門」の項を、幸弘公の視点で見ている。だから、「鳥は自由に天地を駆けるもので、狭い籠の中に閉じ込めてはならない」と言う部分と、「領内のものに飼鳥は悪い趣味だと気付かせる為に、仕組んだ」とする部分に目が行っていたのであった。

徳川五代將軍綱吉の「お犬様」騒動のはなしと、この段は何等かの関係が有るのかも知れない。ペットの問題は、現代でもトラブルの原因となりやすい。この手の話は、実に古くて新しいテーマなのである。

「日暮硯」の主人公は、恩田木工民親ではなかった。

「日暮硯」の主人公が真田公であったとしたら、今までの「日暮硯」の解釈を再検討しなくてはならない。恩田木工民親をメインに讀めたたえたのか、忠臣たる恩田木工民親を抜擢した真田幸弘公をメインに据えたのかでは「日暮硯」の成立の原因、つまり、なぜ「日暮硯」ができたのかを考えなくてはならない。

松代藩の公文書から「日暮硯」という題目が、いまだに発見されていないのは、何故なのだろう。

「日暮硯」に描かれていることで、郷土史研究者が問題にしたのは、「日暮硯」の史実との食い違いである。

「日暮硯」が、歴史の第一次資料としては、あまり価値が認められていないのは、周知のとおりである。

私もこの場で、「日暮硯」は、史実のみを記した歴史の書ではないことを強調したい。

大胆な仮説をたててしまうと、「日暮硯」は、信州松代藩六代目藩主、真田幸弘公、従四位下の叙勲を祝って出版さ

れたものである。

あるいは、従四位下の位階勲等を、目指して幕府、幕閣に松代藩はこのようなやりかたで、財政を建て直しましたよ。という、アピールの書だったのではなからうか。

あるいは、現代の政府広報のような使われ方をしたとしても不思議はない。

作者は、当時の、勿論名の有る、戯作者で、日暮里の、岡上の小屋から、日の沈む信州の山並みに思いを馳せて「日暮硯」を書き上げたのだろう。

「日暮硯」は、江戸時代すでに、東北から中国岡山地方にまで、行き渡っていた点にも、注目の必要がある。

「日暮硯」は、真田幸弘公にとつてだけ、値打ちの有るものでなく、時の幕府の目指した理想的な藩経営の有るべき姿として、各大名に配布されたのではあるまいか。

東北の米沢藩主、上杉鷹山公は、その藩政改革の際「日暮硯」の精神を重く用いて民百姓より尊敬されたのである。

真田幸弘公が、松代藩内では、民百姓から上杉公のように、歓迎を受けたとは文書に残っていないのは、壮年時から中央の幕府政治に興味を覚え、松代藩政にはあまり口を挟まなかつたせいかも知れない。そこへゆくと、恩田木工民親は、地元松代藩ではスーパースターであり、田村騷動記ころから、史料にも、物語にも良くその姿をのぞかせている。それらに描かれている恩田木工民親象は、「日暮硯」の木工以上に寛大で穏やかな性格がうかがわれる。

恩田木工民親の改革は、百姓と殿様にとつては良い改革であった。

しかし、中下級武士の生活は閹収入が無くなったことで苦しさを増したはずである。

明治維新後、松代が急速に寂れ、本来なら県庁の所在地になるべきところを、ただの小さな町になってしまったのは、ご用商人たちの衰退、また恩田一族を含めての家老たちの離藩上京による町の空洞化であろう。

明治維新で自宅の裏に田畑をもつ下級武士たちは松代にいても生きて行くことが可能だったが、お城の近くの家老たちは、唯一の収入源を失い、生きて行くのに困つたに違いない。

突き詰めて言えば、恩田木工民親が余計な改革をしなければ、商人ともども充分な余力をもって維新を迎えられたことも事実である。

今ごろ、長野県では無く、松代県松代市と名乗っていたかも知れないと考えると、恩田木工民親の果たした役割の功罪のバランスは、どちらとも言えないところである。

又、「日暮硯」は、上州沼田で産声を上げた真田一族のレクイエム（鎮魂歌）にもなってしまったのである。

名君、幸弘公は、宝暦十年（一七六〇）松平定賢の娘をもらい、男子に恵まれず、彦根の井伊公の四男を、七代幸専として、長女お三千にむかえ、そのむすめを浜松藩主にとつがせ、幸専の孫娘にあたる姫を白河公松平定信の次男にめあわせ、養子幸實として八代松代藩主の座を

徳川一族にゆづったのである。幸實は、主に江戸にあり、天保一二年（一八四二）より弘化一年（一八四四）まで老中の大役を勤め幕末の日本を動かしたひとりであった。

真田の男子の血筋は幸弘公で、絶え、そのあとの松代藩は、実質松平一族の領地となるわけである。

恩田木工民親が、命と引き換えに守った主君の名誉と、百姓たちの安泰は、実は、解雇され行き場を失った足軽たちと、改革以後うま味の無くなった中上級武士、商人の犠牲の上に成功した改革であった事実を覚えておかねばならない。

天明三年（一七八二）真田幸弘公は、四〇歳で、念願の従四位の下を、松平定信公と同時に手に入れる。児玉幸多氏は、松平定信公の日記、「字下の人言」を解説され、従四位下が、従五位と比べて格段の待遇だったと著書「大名」の中で触れられている。

十萬石が、その境界線であったとされ、外様大名の真田家は、松平家の五、六倍の費用を昇格の根回しにばらまいたのである。

つまり、郷土史研究諸子（西沢武彦氏、小林計一郎氏）が、松代の藩財政は明治まで好転しなかったとあるが、幕末には佐久間象山を、育て江戸幕府の要職について徳川の締めくくりを果たせたことといい、領内で、飢えや苦しきから起こった一揆、打ち壊しのたぐいが、田村騒動の寛延四年（一七五二）から幕末までなかった点を注目しないといけない。

とくに天明の大飢饉のときに、全国規模で騒動が起きた際にも比較的平穩であったのは、恩田木工民親の藩政改革が

成功したこと（農民は食うのにさほどは困らなかつた）の立派な証拠ではなからうか。

昭和五二年、子供の読み物として、信濃教育会出版部より「日暮硯の謎をとく」を出版した際には、「日暮硯」の主人公は恩田木工民親その人の功績が、この本で顕彰されているものとばかり思っていた。十五年の歳月が経ち、再び「日暮硯」に取り組んで、初日のことである。

引用した「日暮硯」冒頭の記述に大いに打ちのめされた。

文庫本二十ページまで恩田木工民親の記載がない。二十一ページにして恩田木工民親はやっと登場するのである。

冒頭の文のみから、読み取れることは、松代藩（六代）藩主真田（幸弘）公は、この書が出来た時点で健在であることがわかる。

真田公とのみ言つて、その戒名、もしくは送り名が、書かれていないことに注目しよう。

当代の真田公ということは、とりもなおさず、幸弘公のことであり、寛保元年（一七四一）、正月二十一日松代で誕生。幼名を豊松、十三歳で家督を相続。そこで幸豊、天明元年（一七七九）初めて幸弘公になるのである。

つまり、それは「日暮硯」の出版意図に関わる問題であるので、実に重大な問題である。

昨年、信州大学の教育学部に大学院が設けられ、滝沢貞夫教授の指導下で、竹中雅幸氏ともにゼミで「日暮硯」の読解が始まったのは平成四年の四月である。

テキストは、国立史料館の笠谷和比古氏校注による岩波文庫版、新訂「日暮硯」である。

まず、最初の時間に、本文を読んで「日暮硯」の主人公は、恩田木工民親ではなく、真田幸弘公なのではないかと、私が発言したことで、このゼミは「日暮硯」の誕生の秘密について考究する場となるのである。

笠谷和比古氏は、「日暮硯」諸写本の研究（松代・創刊号）で原典的問題に着目され、現存する諸写本から、オリジナルの「日暮硯」を復元しようと努力された。その研究の集大成が、岩波文庫版の新訂「日暮硯」である。この「日暮硯」が、現在のところ「日暮硯」の決定版であり、笠谷和比古氏の研究によって、「日暮硯」の研究は、何段階も前進できる基盤が出来上がったと言っても言い過ぎではなからう。

同時に、仁科叔子氏の、松代藩觀察日記書抜、家老日記等の原典解説研究の成果が、松代・創刊号から掲載されており、「日暮硯」時代の記述も多く、史実としての「日暮硯」の時代を生々しく読者伝えられた功績は無比のものである。笠谷和比古氏の研究が、江戸表の業績だとすれば、仁科叔子氏の研究業績は、在松代ならではの価値の高いものである。そういうわけで、今回の、「日暮硯」の研究は、笠谷和比古氏、仁科叔子氏両氏の研究成果の上に成立するものである。

従来より「日暮硯」は、管理職心構え養成の格好の読み合わせテキストとして、いろいろなところの講習会で愛読されている。

あるいは、歴史事実との、整合性がかりに目がいって「日暮硯」は歴史的価値に問題有りとする学者もいる。

「日暮硯」に関する著作は、多くを数えるが、中でもセゾングループの総師、堤清二氏の手による「日暮硯」は、その出版意図からして、経営者の切羽詰まった感情があった。

内容だけでなく何故、堤清二氏が、あの時期に「日暮硯」だったのかを読み取れたのは、私一人ではなかった筈である。「日暮硯」は危機管理、危険回避の特効薬であるとの捉え方である。

つまり、「日暮硯」は、歴史を後世に正確に伝える記録書ではないということである。

「日暮硯」が、全国的に安価で読まれるようになったのは、昭和一六年発行の、西尾実、林博校注の岩波文庫、一つ

星（最廉価）版からである。西尾実氏と岩波書店主は、ともに信州の中南信の出身である。

「この岩波文庫版『日暮硯』は、戦争後期、太平洋を越えアメリカへ渡り、日本人の思考・価値感覚の研究書として用いられ、連合軍の終戦、占領統治政策の参考にされた。」

イザヤベンダサンこと、山本七平氏は連合軍関係者の立場として著書「日本人とユダヤ人」第5章ゼカリヤの夢と恩田木工で、恩田木工民親を奇跡の経世家として紙面に華々しく登場させている。

これが、昭和四六年のことで、奇跡の財政再建の書「日暮硯」と、奇跡を起こした恩田木工の手腕は、この年の大ベストセラーとなったこの本の著者とともに、日本中の読書人のアイドルになった。「日暮硯」著作者の意図と違って、「日暮硯」のなかの恩田木工が一人歩きをはじめたのである。それは主人公のすり代わりという、だいでんがえしによってであった。

作者の執筆意図はどこに在ったのだろうか。日暮硯の執筆意図が、研究されたり着目されたりすることは今まで例を見ない。今までの先輩諸氏の研究は主に「日暮硯」は「史実か虚構か」に焦点をあてた郷土史研究家の手によるもの。

また「日暮硯」に描かれた恩田木工民親の言動行動理念思想についての考察は、政治経済研究者にであった。歴史書としての捉え方と政治経済の実用書、あるいは行動理念の底をさぐる思想書としての捉え方では、「日暮硯」の価値も全く違ったものになってしまう危険がある。

事実の相連の精密さを要求される時間の単位が「歴史研究」なら、「思想研究」は、その深み広がり深さ面積容積、空間の単位、メートルに喩えても良からう。

さらに、表記記述文体、構成の研究はおもしろさそこを描かれた人間関係の情から発せられた心の重さをはかるキログラム単位にあてはめてみた。

そして「文学研究」は、それらの単位の総合であるところの時間×距離×重量Ⅱ「エネルギー」なのである。つまり、人の心に与える感銘の総合力が文学なのであって「日暮硯」をそういった意味合いでの文学研究の一分野と

して、本研究で扱ってみたかったのである。

研究の第一歩は、「日暮硯」が「文学」で在ることの実証を試みた。

「日暮硯」がフィクションであるのか、ノンフィクションであるのかは重要なことである。

そこで、「日暮硯」のどの部分が事実でどの部分が、誤謬もしくは虚構なのかをはつきりさせてみたいと考えたのである。

その手段として、仁科叔子氏発掘の国立史料館蔵「松代藩監察日記書抜」によって恩田木工の勝手方就任時期が「日暮硯」のいう宝暦五年ではなく、同七年八月二十八日であることを確認した。

この二年の違いが「日暮硯」の存在価値そのものに大きな影響を与えるのである。

松代藩の藩財政建て直しが、多くの郷土史研究家の言うように「失敗した」ものでなく、「見事に成功したものであること」の証拠資料の発掘に、かなりの時間を費やした。

その結果、「日暮硯」に描かれているとおり財政建て直しまだ人心建て直しは成功を治めたことが確認できた。

松代藩財政建て直しの「原資」が、宝暦七年春の水害の対策金が同年十一月二十一日に幕府より金一万両が交付され、それを活用して「財政」のやりくりをして領民への手当、藩士への給料支払いなど滞りを無くしたうえに、翌宝暦八年二月二十七日恩田木工の施政方針が公示され全領民が喜んで受け入れたのである。ここに「日暮硯」の根底になる財政の建て直し、人心の建て直しが成功したことの論拠を築くことが出来た

また、後の浅間山の噴火が始まる天明の大飢饉にも、我死者ゼロ、一揆ゼロという当時の他地方の惨状から考えれば奇跡に近い治世ができたのは特筆すべきことである。

この研究の一部は真田宝物館発行の「松代」第六号（平成五年刊）に発表して、たくさんの方から貴重な資料やご意見ご指導を戴くことができた。

平生のご指導のみならず、こういう論文発表の機会を与えて下さった我が師、滝沢貞夫教授と快く資料を使わせていただいた仁科叔子氏の恩情のお陰である。お二人に深く感謝致したい。

第二部として「日暮硯」の原典と目される「田村記」の記述を追いながら江戸方の立場で振りかざした「新法」が地元民の反発を買って失脚した田村半右衛門の財政建直し策が、反面教師としての「日暮硯」の文中の恩田木工の言動に見える一致点、相違点に着目して「田村記」が「日暮硯」の原典であることの確認と領民が恩田木工を信頼していった過程に迫り、「日暮硯」宝暦の改革の成功要因が「田村記」にあったことがわかった。

その結果、土地に縛られている農民の保守性、それに気付かぬ為政者と「新法好き」の江戸方の役人、御上と部下領民の間に入って苦しんだ領地方の家老の苦悩と治藩成功の喜びの様子が「田村記」からも「日暮硯」からも伝わってくるのである。ただ、折角の資料の分析が充分でなくまだまだ、気付かぬ点や見落としした事実も多く在りそうである。それが、論の空回りを招きもつと大切なことを言わなければならなかったのではないかとこの個所が論文にあったことが心残りである。次の機会に修正して行きたいと思っている。

以上が「日暮硯の研究」のきっかけと経過のあらましである。修士論文と史料は枚数の関係でここに掲載できなかつたが、修士論文となつた「日暮硯の研究」をお読みいただいて、ご指導を賜わりたく存じます。

***おわりに

この研究を通じて多くの方から貴重な資料、ご意見を頂戴した。論文の付録に付けた「鳥籠の山彦」（仁科家所蔵本）今回初めて世に出た「日暮硯」の異本で、従来僧侶の伝承記述とされていた「日暮硯」の異本が御殿医師のお宅から出てきたことに「日暮硯」発生の著者が医師だった可能性も出てきたことは興味深いし、藩の内情を知る立場の人間が、「日暮硯」成立には欠かせない存在であることを考えるとき何か大きなヒントがこの異本には詰まっていそうである。

また、恩田木工の直筆の手紙も論文に添えることが出来た、恩田木工の人柄が偲ばれる手跡文面である。真実の姿を追及してその事実の上で研究者の想いを著すことの大切さを教えていただいた大学院生活であつた。ご指導いただいた我が師滝沢先生始め国語科の先生方の温かいお心遣いにも感謝あるのみです。

（おんだ つねひさ 長野工業高校）